
花畑の中の一輪

藤 秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花畑の中の一輪

【コード】

N0511H

【作者名】

藤 秀

【あらすじ】

一人の男はある花を探していた。探しても探しても見つからない。焦りと疲労で崖下へと足を滑らせてしまった彼はその後……。

一輪目（前書き）

東方projectの2次創作となっています。

オリジナルの主人公が登場します。

原作とは設定が違う恐れがあります。

花を題材にしておりますが多々詳細が誤っているかもしれません。

初投稿なので文面は読み辛いかもしれませんがご了承承願います。

一輪目

「はあ、ここにも咲いてない・・・」

延々と続く山の獣道を歩きまわって一体どのくらい経ったのだろうか？
もしかしたら気付かない内に遭難何て事になってるかもしれない。
でも…

「どうしても、あの花が見たいんだ。」

その強い思いとは裏腹に、早朝から歩き続けた僕の体力は限界に来ていたらしく、

「う、うわあああ！」

草木に覆われ隠れていた崖下へと足を滑らせてしまった。

「痛っっっ…」

直ぐに意識を取り戻したつもりだが、もしかしたら気を失っていた
かもしれない。

そうなら、どのくらい僕は眠っていたのだろう。

体の彼方此方を擦り剥いてはいるものの、大きな怪我はしていない
ようだ。

上を見あげると木々の間から木漏れ日が差し込んでいた。

「あれ？崖から落ちたはずだと思ったんだけどな。」

周りは、まだ人の手が入っていないような鬱蒼とした森だった。

ここにいっても始まらないと、立ち上がり取り敢えず歩を進める。

すると前方から木々が少なくなり始め、明るく開けた場所に出た。

「凄い…」

そこは、地平線の向こうにまで続く見渡す限りの花畑。

正に『花の絨毯』と呼ぶに相応しい程の広大な花畑。

「ここなら、見つかるかもしれない。」

自分の目的を思い出し、その花畑に向かう。

良く良く見てみると、ここは自然に群生した花畑ではなく人の手によって作られたものだと言う事に気づいた。

畦道や各花の種類によって分けられながらも、あくまで自然に育てられた花々。

しかし、人の手によって作られた花畑だと気づき少し希望が薄れる。

僕の探している花は、尽く庭園や造園にはなかった。

様々な文献も読み漁り、全国を回ってきた。

それでも見つけれなかったのは、恐らくもう自然に咲いている物しかないと感じたから。

「それでも…！」

と、気合いを入れ。

周辺の花から調べていく。

陽も傾き始め、見える範囲での1/100程度調べ終えたところで今日は休むことにした。

どこかに山小屋、最悪は開けた処を探し回ると、向日葵畑の葉が揺らいだ。

(まずい！野生の動物がいたのか！？)

一応登山用の装備で来てはいるが、いざ襲われれば勝てる訳もない。

そして向日葵の間を割いて出てくる影。

(！？)

「ん？あなた、何勝手に人の畑に入ってるのよ。」

人だった。

それも、まだそんなに歳のいっていないような少女。

意外な遭遇にすぐには返答できなかったが、直ぐに返す。

「あ、ああ。すみません。ここは貴女の花畑だったんですね。」

「そういつているじゃない。」

暫し沈黙が流れる。

「ここは貴方のような人が来るところではないわ。忠告よ、早く里へ帰りなさい。」

一足譚に促されてしまうがここで帰る訳にはどうしてもいかなかった。

「あ、あの！お願いがあります！」

彼女は踵を返した足を止め、横目に振りむく。

「この花畑を見て回ってもいいでしょうか？」

彼女はずっと僕を睨んだままだった。

「どうしても探したい花があるんです！探ったりはしません。この目に、写したいんです。」

つい熱くなってしまったが、それでも彼女は喋らず踵を返してしまっただ。

「あのー！」

「勝手にしなさい。」

僕の言葉を切るように発せられた言葉は、口調はきついが天使の囁きにすら聞こえた。

その後彼女は畦道の向こうへと行ってしまったが、僕は適当に広い場所を見つけテントを張りその日を越えた。

二輪目

翌日は良く陽の照った天気だった。

張り切りながらテントから抜け出すと、昨日は見え尽くせなかったこの花畑が視界全部を埋める。

「楽園のようだ。」

どんな人が来てもきつとそう思うだろう。

極彩色に彩られたこの場所は天国のそれといっても信じてしまうほどだった。

テントをしまい、リュックを背負って歩き出す。

今見渡して気づいたが、昨日探していた場所は比較的乾燥した土地で咲く花ばかりだった。

畑の分割は気候や土の条件毎にも分けられているようで、僕の探している花は湿った場所に咲く花。

あそこには恐らく無いだろう。

畦道を歩きながら条件が合致する花を目印に探していると。

「お、孔雀草だ。これだけ綺麗に群生しているのは珍しい……、」

違和感が生まれる。

孔雀草は本来11月頃に咲く花であつて、こんな陽気…ましてやこれから夏に入ろうとしている時期に花を咲かせるなんて事は絶対にない。

そしてなにより、

「あそこには向日葵が咲いていた筈だ…」

そう、昨日この花畑の持主の少女に会つた場所、彼女は向日葵畑から出てきた。

その後は、当初の目的も忘れ花畑を駆け巡つた。

「はあはあ…これは、雪割草。」

走る。

「こつちは芙蓉。」

走る。

「そんな、竜舌蘭が群生してる。」

気候、季節、種別……

本来ならその花たちは出会う事がないであろう他の花たちと肩を並べ美しく咲いていた。

「なんなんだここは……、どうなっているんだ!？」

「あら、気づいたのね。」

「!？」

反動的に後ろを振り返ると、昨日出会った少女が日傘を差して佇んでいた。

「君！ここはどうなっているんだ、この花たちは……」

「まさかとは思っていたけれど、あなた外から来た人なのね？」

外？

話をはぐらかされたようで癪に障る。

僕は植物学者ではないが、これでも人生の殆んどを草花に費やしてきている。

此処の花たちは異常だ。

「何を言っているんだ、それよりも此処の花たちは……」

「私の力よ。」

「力？」

もう、話が噛み合ってすらいない。

「『花を操る程度の能力』。それが私の力。この幻想郷での私の力よ。」

「花を…操る…？それは一体……」

そういつて彼女は傍らに咲くまだ芽吹いたばかりの竜舌蘭に優しく触れる。

竜舌蘭とは、別名センチユリー・プラントとも呼ばれ、開花周期が数十年単位にもなる花であり。

その花を見ることは一生の内でも一度拝めればいい方なのだ。

その花が、今僕の目の前でゆっくりと花開き…咲いた。

「わかったかしら？」

「どうして……」

「外の人間に話しても無駄だったようね。」

それだけを残し彼女は歩いて行ってしまった。

疑問しか残らない。

何故、様々な花が咲いている？

どうやって、彼女が触れただけで花が咲いた？

ここは、ゲンソウキョウ？

僕は、外の人間？

そして、何故悲しそうな顔をしていたんだろう？

その日はあり得ないことの連続で、目的の花を探す気にはなれなかった。

何の当てもなくこの楽園を彷徨い様々な花を見る。

春・夏・秋・冬の気候を知らないように美しく咲き続ける花々。
むしろ自分の常識が間違っているように感じてくる。

そして、彼女の悲しそうな横顔が頭から離れなかった。

ふと顔をあげると一軒の家が見える。

ああ、あれは彼女の家なのか、とすぐに分かった。

でも尋ねるような気分でもなかった。

そこから少し距離をとった場所にテントを建て、今日は眠ることにした。

三輪目

一晩考えを巡らせて思う。

自分の目的は「あの花」を探すことなのだ。

彼女にも願い出てしまった手前、簡単に諦める訳にはいかない。

今日こそは見つけようと、条件の合う花を探していく。

そして、目印になるであろう花を見つけた。

「この花が在るってことは…!!」

広大な土地を只々走る。

昨日の違和感ではなく、期待を胸に只々走る。

そして見つけた。

「あつた…見つけた。」

九輪草。

絶滅危惧種に指定され、自然に生きた花はないとされている花が僕の目の前に居る。

太陽の光を目一杯に受け。

小さく溢れそうな花を必死に着け。

優しくそよぐ風に身を揺らせながら。

しっかりと生きていた。

「見つけたよ、母さん。」

「探している花って九輪草だったのね。」

背後から声が聞こえる。

まだ出会って数時間しか経っていないのに容易に想像が付く彼女は、
今日も日傘を肩に差し歩いてきた。

「はい。ありました。……僕の探していた花が。」

体裁なんて気にしない。

母が見たいと願い、そして叶わなかった。

僕の生涯を掛けた花。

溢れる涙を止めることはできなかったし、止めようとも思わなかった。
た。

でも、何か引つ掛かっていた。

「用は済んだのね。なら早々に……」

「この花も、君の”力”で……?」

振り返って話しかける。

返答に時間はかからなかった。

「ええ。」

そうでないでくれと願っていたが、現実には冷たかった。

彼女が昨日見せてくれた不思議な現象。

それは、美しさの中に残酷さを見たような感覚。

命を弄ぶ神の悪戯に見えて、仕様がなかった。

「そうですか…。」

それでもこの美しい庭園を造り出したのは彼女の行い。
避難するつもりも批判するつもりもない。

只、僕と彼女の考えの差なのだから。

落ち込む気持ちを表に出さぬよう堪えながら背負ったリュックを確
りと背負い直す。

「ありがとうございました。」

一礼。

「……。」

何も言葉は返ってこなかった。

此処にたどり着いた畦道を森へと向かう。

「何よ?」

すれ違い様に掛けられた声は、明らかに怒気を含んでいた。

「え？」

横に顔を向けると鋭い流し目が僕を捉えて逃がさない。

「言いたい事はちゃんと言いなさい。」

見透かされていた僕の心理。

「あ、あの…。」

まるで獣に見つかった鼠のように意竦む。

「九輪草の…。」

そして、開いた僕の口からは意外な言葉が出ていた。

「九輪草の自然群生地はこの近くに有りますか？」

「……。」

笑顔で言った筈なのに、彼女は僕を睨み続けた。

そしてゆっくり瞼を下ろし、閉じた傘で遠くの山を指す。

「中腹に滝が有るわ、川を下流から遡りなさい。」

僕を見ずに説明してくれた。

僕はポケットに手を入れ、

「ご親切に。後、この美しい花畑を見せてくれたお礼に。」

向日葵の種を彼女に差し出す。

「この向日葵は、僕が全国を回っていた時に見つけた珍しい種です。独り寂しく咲かせてしまっただけは可哀想なので、どうかあの中で皆と一緒に。」

そう言うと彼女は、僕をもう一度見つめ。

包むように優しく受け取ってくれた。

やはり根本は花を純粹に愛してくれている人。

その細やかな優しさに自然と笑顔になる。

もう一度礼をし。

足をかの山へ向けた。

背には暫く彼女の視線を感じていた。

四輪目

昼頃に出たのに山は見るよりもずっと遙かに有るらしく、麓にさえ着くことなく夜を迎えてしまった。

途中の獣道を抜けた先、少しの広がりを見つけ今日は眠ることにした。

此処も人の手が全く入っていないらしく、森が自然を造り自然が森を守る。

そんな環境が少し居心地を良くした。

ふと、テント外から物音が聞こえた。

自然故に野性動物が居るとは思っていたが、思った以上に此処は豊かしい。

一気に緊張が走る。

次の瞬間、テントの天井が引き裂かれた。

鋭い爪か何かで振り払われた様に裂かれた生地を見てパニックをお越しながら熊だと断定する。

サバイバル用の武装は有るが、

「こんな所で死ぬわけには行かないんだ。」

熊との遭遇は初めてじゃない。

高いところを見つけ見下ろし、自分有利に見せなければ逃げも攻めもできない。

退治すべく視線を向け、気付いた。

「なんだ…、これは…。」

黒い。

どす黒い生き物。

紅い眼光を揺らし、熊なんて訳ないほどの体軀をし、爪と言つより鎌のような手。

禍々しいとはこれを指すのだと思った。

それは、ユラリと体をしならせこちらに寄ってくる。

早く逃げないと。

と、必死に考えるが体が動かない。

人間、未知の物に遭遇すると嫌が応でも頭がパニックを起こしてしまい、動作が止まってしまうことを僕は初めて知った。

僕の中でギリギリ追えないような早さで繰り出された鎌は、僕を容易に切り裂いた。

筈だった。

「低級風情が人の獲物に何してるの？」

振り上げられた鎌は、寸での所で止まっていた。

そして、彼女の声が聞こえる。

向日葵の良く似合う彼女。

「……………」

僕の方を横目で見ると、直ぐに視線をソレに戻し再び口を開く。

「去りなさい。さもなければ……………」

彼女の言葉を良い終える前にソレは霞のように消え去った。

身の危険が無くなった瞬間に僕は無様にも座り込んでしまう。

鎌の攻撃を防いだであろう日傘は、どこも傷ついていなかった。

「あなたは何を考えているの？」

「……………え？」

「ここは幻想郷だと言った筈よ。」

幻想郷。

あの時は、その言葉が特別な意味を持つものとは思わなかった。

それは、あの花畑の名称ではないこと。

それは、地名ではないこと。

それは、日本ではないということ。

それは、異なる世界であるということ。

それらまとめて話してくれた。

「幻想…郷。」

僕はこの世界の名前を声に出す。

途端に現実味が溢れて実感が意識を満たしていく。

「そうよ。だから探していた物がすぐ見つかったり、妖怪だっているわ。」

「そうか…。」

ここで見て感じたものは謂わば長い夢。
感触もあれば想いもある夢。

それ故に悔しかった。

九輪草を見つけ涙したあの感情は本物なのに、まるで実物はそこにはなかったかのように。

「あなたはこの幻想郷から帰る事はできない。選びなさい、惨めにもがき生きるか今此処で私に殺されるか。」

落ち込んでいた顔を上げ彼女を見る。

思ってた以上に驚きは少なかつた。

先程のやつを退けたのは彼女、逆に納得してしまったのかもしい。

「まさか本当に行くとは思わなかったけど、その様子なら今此処で……」

「僕は……。」

彼女の言葉を切って入る。

相当おかしな顔をしているんだと思う。

「自然の九輪草を見てみたいです。」

笑顔で言っただけだが複雑な感情が邪魔をして上手く笑えなかった。

そのせいで彼女も僕から目を反らしてしまったんだと思う。

五輪目

それから僕は、彼女に教えられた道をひた進んだ。

次の日には山の麓に付き、清流を遡った。

その間も彼女は僕の数歩後ろを着いてきていた。

最初は大丈夫だと断ったのだが、

「私は山に用があるだけよ。」

と返され、それ以上は何も言えなかった。

それでも僕は心なしか嬉しかった。

危険からの安心なんか二の次で、淡泊な程の彼女が側に居るのは心が安らいだ。

僕は自然と声をかけていた。

「あの”力”、畑の花全部に使っているのかい？」

「そうよ。」

「そうか、畑の手入れは君一人で？」

「ええ。」

「それは凄いですね。量もそうだけど、種類が本当に多彩だから手

入れも大変では？」

「……。」

不意に言葉が反ってこない。

少し煩くしすぎたかなと思いい後ろを振り替えると、彼女は僕を睨んでいた。

「もう一度言うわ。言いたいことが有るなら言いなさい。」

あの花畑の時の様に捲し立てられる。

清流の直ぐ傍の岩場で二人は足を止める。

河のせせらぎが辺りを包むが、僕は覚悟を決めて、

「あの花たちには、生きてる感じがしない。」

「なんですって？」

「君の力によって”生かされている”と、僕は感じた。」

もう半分は自棄で言っているのかも。

人のする事に口を出すなんてことはあまりしない僕でも、それが花なら話は別だった。

「永遠の命って言うのは生けとし生ける物の願いかもしれない。でも花たちは沢山の子孫の残し方を身に付け生きてきた強い種だ、君の力を頼りにせずとも強く生きれる筈だ。」

「なら何故あなたは九輪草を探していたの。言った通り此処には自然に群生する九輪草は珍しくないわ。」

彼女の言いたいことはわかる。

僕の世界では九輪草は絶滅危惧種だ。

そうなった原因。

「それは……人間の勝手の性だ。」

「それで、守るためにはどうすれば良いの?」

何も言い返せなくなる。

正論だ。

人間の愚かな行いによって絶滅に追いやられた種は花に限らない。守ろうと思うもの達は、守れば手段を問わないのかもしれない。でも、

「なら、何故”力”を使った後の君はあんなにも悲しそうな顔をしているんだ?」

「っ!?!?」

竜舌欄の開花の時に目にしたものは花だけじゃない。

彼女の悲しそうな目。

あれは……、

「君も、本当は使いたくないんじゃないかい?」

「なら何故、私にこの”力”が有るの?」

正論に正論。

討議の平行線。

僕の考えも強ち間違いではない筈。

でも彼女の言うことも勿論間違いではない。

でも、彼女の言動に一抹の矛盾を感じるのも確か。

その明確な部分が見つけれない自分が悔しかった。

「わかったなら行きましょう。こんな所に居たらまたアイツみたいなのが来るわ。」

止まっている僕を追い越して行く彼女。

その背に僕の言葉は何も届かないと感じた。

六輪目

妖怪、彼女から聞いたあの黒い生き物からの襲撃からずっと歩き続け、体力の限界と共に木々の隙間から除く僅かな空が少しずつ白み始めていた。

荒い息をしながら歩く僕とは対極に、彼女は息も切らさずスタスタと歩いていく。

先の言い合いから彼女がずっと先頭を歩いている。

足を止め休むと僅かに待ってくれるのが幸いだ。

「もうすぐよ。」

こうやって声もかけてくれる。

喜ばしいが僕の中では靄がかかったような心境だった。

そして、ようやく滝壺に着く。

そこは小さなオアシスのようだった。

小さいながらも沢山の草木が生い茂り、ちらほらと野生動物達も目に見える。

僕も空になった水筒に水を補給し、頭全部を水に浸す。

バツと上げた顔には爽やかな風が撫でる。

疲労を一時的に取ってくれた水は『母なる』と言つ言葉を思い浮かばせる。

「私の畑もこの水から来ているのよ。」

滝壺の縁に咲く僕でも名前の知らない小さな花を優しく愛でながら、彼女は話してくれた。

「ああ、ならあの美しさも納得ですね。」

顔をタオルで拭いている籠った僕の声の方へ彼女が振り向く。

「花もちやんと生き物です。美味しい水と住みやすい土、それがあればある程度は美しく咲きます。」

「ある程度?」

彼女の返答も心なしか優しい。

やはり自然は人の心をリラックスさせてくれるようだ。

「ええ、後は手入れなど草花が自分ではできない事を人間にしてもらう事と、」

リュックにタオルを戻す。

再度彼女を見て。

「あなたの楽しそうな声や笑顔です。」

「?」

彼女は意味がわからなそうに首をかしげる。

「草花と人は、気づけば直ぐ傍にいる一番身近な共存体です。それ故に無意識に人は草木を愛で、草木は僕たちを癒してくれます。その行為に僕は『見返し』とは思いません。もつと…そう、友情や愛情の様なものだと思っと思っています。」

僕がこの話をするのは初めてかもしれない。

ずっと九輪草を追って来たこの人生。

この道の関係者には沢山会ったが、それは協力の名のもとに知り合った上辺。

互いの思いや意見を交換したことはなかった。

「だからあの花畑はあんなにも美しく咲き誇っていて、今だってあなたが触れている花は喜んでいと僕は思いますよ。」

だから先の言い合いも、言い方が悪いが楽しかった。

交わした内容は重い物だったが真剣に話せたことが嬉しかった。

(そうか、僕が嬉しかったこの気持はそのせいかな…。)

自然と彼女へと向けた表情も柔らかかった。

「そう、私が…。」

視線を花に戻し、また優しく花びらに触れる。

花もじゃれつく様に見えた。

彼女の笑顔を始め見た。

たぶんこの表現は間違っではないと思う。

「向日葵……。」

「え？」

単純に聞こえなかったようで彼女が聴き返してくる。
その時の僕は少しおかしかったのかもしれない。

「君は向日葵のように綺麗だね。」

自然と言葉が口から零れてしまった。

言ったあとにハッとして急いで口を閉じるが時すでに遅し。

彼女は僕から顔をそらして滝の方を向いてしまった。

「あ、ありがとう……。」

滝の音に消されながらもしっぴかりと聞こえた声に、僕は熱を増しも
う一度水に顔を浸けていた。

七輪目

息が持つ限り顔を浸けていたため、若干チアノーゼだ。

あの後、やはりあの言い合いは僕が余計な事を言った事からと感じ謝罪した。

笑みを含む顔で彼女は何も言わなかったが、僕はそれで良いと受け取った。

周辺を散策していると、彼女が言った通り簡単に九輪草を見つかることができた。

滝の水しぶきを適度にその身が受け。

花びらに乗っている水が光を反射してより美しかった。

ここでも僕は涙を流してしまった。

彼女には、

「よく泣くわね。」

と、言われてしまったが嬉しさを我慢する理由は思いつかないのだから仕様がなない。

僕は暫く九輪草を眺めていたが、屈んでいた膝を立たせると帰り支度をし始めた。

「探っていないの？」

当然の質問だろう。

僕が生涯を捧げて来た花だ。
でも、

「はい。この花は此処にいるから美しい。無下に仲間から引き離すのは心が痛いからです。」

彼女も笑みを浮かべて納得してくれた。

それに、もう戻れないのなら、写真を撮るよりも心に確りと刻んでおいた方が良いでしょう。

「そういえば、ここに用があるといっていましたけどもう済んだんですか？」

「もう……用はなくなっただわ。」

「？　そうですか。」

何か含みのあるような言葉だったが彼女が良いというなら良いのだらう。

僕らは来た道に戻った。

帰りの道は来た時よりも気分が楽だった。

彼女との言い合いから始まり、滝壺での和解。

それだけの事でこつも足取りが軽いのは僕が単純だからだろうか？
うん、きっとそうなのだろう。

僕の生きる上で全ての事を果たした。

母が亡くなって。

母が好きだった花を棺に添える事が出来ずに悔んだあの日から。

誰もが聴けば「そんなこと」かもしれない僕の生涯の目的。

九輪草を見つけて母に話してあげる事。

『自然に咲く九輪草の花は小さな命の輝きを感じました。』

『風に靡く姿は、守りたくなる様な愛しさと頑張れと励ましたくなる気持ちにさせてくれました。』

『寄り添い合う九輪草たちは、僕と母さんの昔を見ているようで涙が出てしまいました。』

『謝らなければいけないことも。棺に添えるには少し儂いと感じたので、添えなくてよかったと、今の僕は思います。』

『母さんが好きだった花は、僕も大好きになりました。』

『最後に、僕の生涯を通して様々な人に出会いました。快く協力してくれる人。花を利益にしか考えない人。花への独占欲が強い人。花の生態にしか興味のない人。沢山見てきました。でも……。』

『最後に出会ったこの方はとても素晴らしい方です。不思議な力を持っていて、それに僕は嫌悪を覚えました。が、本当に花を心から愛しているが故であって、無愛想ですが優しく、付き合いにくそうです。が花には真剣で、笑うと向日葵のように綺麗な人です。』

『本当に。母さんには感謝しています。』

こんなにも美しい世界で終える事が出来たのは母が見守ってくれていたからかもしれない。

河を下りながら僕は、届かない母への思いを告げていた。

八輪目

そうして歩き続けていると、昨日妖怪に襲われた付近に差し掛かった。

テントの残骸と踏み荒らされた装備品が辺りに散らばっている。

「どうしたの？」

足を止めていた僕に振り返りながら彼女が声をかける。

「僕は此処の片づけをしていきます。流石にこのままじゃ周りの草木が可哀相ですから。」

僕は「先に行っていてください」と言っただけで彼女と別れた。

此処から彼女の花畑への道は覚えているが、そういった意味じゃない。

『もう帰れない』

そう言われて、絶望を覚えたのは確かな気持ち。

あの妖怪と対峙して退けた彼女が「殺してくれる」とも言ってくれた。

僕を殺すのは本当に容易な事なのかもしれない。

でも、彼女の手を僕なんかのために汚して欲しくなかった。

「あの手は、花を愛する為にある手なんだ。」

だから、あえて此処で別れた。

九輪草が近くに咲き、自然が豊かで、河のせせらぎが微かに聞こえる場所で、

待っていた。

「やっぱり、来てくれたんだね。」

黒く。

影より、夜より、闇より黒い。

大きな鎌状の手を持ち、熊をも超える体躯。

妖怪。

昨日は彼女が退けてくれたが、そう、『退けた』だけの妖怪はこの山にいる限り僕を狙ってくるのは予想がついた。

もしかしたら山を抜けても僕を狙ってくるかもしれない。

なら尚更此処で僕が何とかしなければならぬ。

昨日、幻想郷の事を教えてくれた時。

僕は外の人間だと教えてくれた。

最初に会った時も言われたが、その時はわからなかった。

彼女曰く。

普通は存在が忘れ去られたり、死した無念が居場所にするらしいこの世界で生きたままその存在を置くのは幻想郷に何らかの歪みを生む原因になりえる可能性がある。

と教えられた。

数日、しかも局地的な範囲でしかこの幻想郷を知らないが、ここは壊れてはいけない場所。

僕なんかのせいで穢れてはいけない場所。

心の底からそう感じ、そう思った。

だからせめてこの場所で僕の存在を消そうと思った。

「あ、彼女の名前。そういえば聞いていなかったな。僕の名前もか……。」

でもダメか、彼女に僕の名前を教えるは彼女の中で僕の存在が残ってしまう危険性がある。

妖怪がゆっくりと僕へ近づいてくる。

恐らく彼女を警戒しているのだろう、昨日より歩みが遅い。

居ないのがわかったのか、態々僕の目の前にまで来て鎌を振り上げる。

逃げる事もしない人間に戸惑ったのだろうか、なんて考え静かに僕は瞳を閉じる。

この短期間で感じたことは決して良い事ばかりじゃなかったけど、幸せを感じる事が多かった。

もう充分、僕は幸せになりすぎた。

覚悟を決めた次の瞬間、鎌の風切り音と共に森に響き渡る音。

パン！

「え…？」

いきなり頬への激痛が走り目を見開くと妖怪は倒れ昨日とは違う霧を体の端から出し消えかかっていた。

そして首をゆっくりと上げると。

向日葵のような彼女が瞳に涙を溜め、ぶったであろつ手を挙げて立ち尽くしていた。

花束「完」

山を登った時は息も切らしていなかったのに、今は肩で息をしている彼女。

色々とパニックになっていた。

何故別れたはずの彼女がここにいて、後ろでは妖怪が倒れ、尚且つ僕の頬はこんなにも痛いのだろうか？

呆けて彼女を見あげるだけだった僕に痺れを切らしたのか彼女の方から口を開いた。

「ふざけないで。」

怖かった。

あまり他人に怒られた経験がなかった僕に向けられた明らかで直線的な彼女の怒り。

怒鳴っている訳ではなく、静かに告げられた言葉が何よりも重かった。

「何をしているの。」

更に告げられた言葉に僕は口を開けなくなっていた。

「目的を果たしたから『はい、さようなら』？ふざけないで。否定するだけしといて私の力をそのままにするつもり？あなたが言う生

きていない花畑がこの先も続くことになるわよ。それともあなたに貰ったあの種もそうしてほしいのかしら？冗談じゃないわ、私は自分の畑だけで手一杯なの。あなたが持つてきた種ならあなたが育てなさい！」

畳みかけるように告げられる言葉。

呆然と聞き入っていた僕は、彼女の言葉と勢いの中に零れる涙を見逃せなかった。

彼女は自分の”力”の理由を考えると語ってくれた。

あの畑をより美しくするために協力しろと語ってくれた。

あの種を育てると語ってくれた。

勝手な自己変換なのはわかってる。

でも残された道がなかった僕に新たな道を教えて導いてくれるこの声は、そう聞こえさせてくれる。

ああ、僕は此処で生きてもいいんだ。

「それは……、困ったな。」

じんわりと痛む頬を摩りながら僕は彼女に顔を向ける。

「君の力も、考えないといけない……し……。」

笑顔を向けているはずなのに僕の目からも涙が零れる。

「あの、花畑は……本当に……一人じゃ大変そう、ですから。」

僕のそんな顔に、困ったような笑ったような顔を向けてくれる彼女。

「僕にも、手伝いを…させてくれますか？」

そして向けられた向日葵のような彼女の笑顔は、九輪草よりも深く心に刻みつけた。

それから、山を下りた僕と彼女はあの向日葵の種を小さな鉢に植え。

このゆっくりとした時間の中で、いつかあの向日葵畑の仲間の下にいけるよう大事に育てていこうと約束しました。

ああ、そうそう。

母さん、九輪草の花言葉って知っていましたか？

彼女、風見幽香さんが教えてくれました。

『幸福を重ねる』だそうですね。

花束「完」(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

初投稿と言うことで読み辛かったり解りにくかったりした点が多々あったとは思ので、ここでお詫びを。

東方2次創作と言うことで「風見幽香」をテーマに作ってみましたが、私の中の幽香は優しいイメージがあったのでこの様に書かせていただきました。

感想等、内容や指摘よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0511h/>

花畑の中の一輪

2010年10月9日16時10分発行